

捨てられたペットボトルの行方

—ウガンダ・カンパラのリサイクル事業—

浅田 静香*

ウガンダの首都カンパラで乗合バスに乗っていると、巨大な「ペットボトルの袋」を見かけることが頻繁にある（写真1）。古い蚊帳から作られた大袋に、使用済みの空きペットボトルがめいっばいに詰めこまれており、その巨大な袋を自転車の後部に乗せて押している人や、空き地にそのペットボトルの袋が置かれている光景をよく目にする。かれらがペットボトルを何に使うのか人びとに尋ねると、たいてい同じ答えが返ってくる—「チャイニーズ（中国人）に売るのよ」と。

聞き取りや地方紙などで情報収集を進めていると、一部のカンパラ市民は、道端やごみ

捨て場にポイ捨てされた空きペットボトルを拾い集め、回収業者に売って現金収入を得ていることが判明した。空きペットボトルは1キログラムあたり600ウガンダ・シリング（約24円）でリサイクル業者に引き取られる。ある人は1ヵ月に300～500キログラムの空きペットボトルを業者に売って、250万ウガンダ・シリング（約10万円）を稼いでいるという [Masaba 2013]。かれらがペットボトルを売る相手はウガンダに16もあるリサイクル業者で、そのほとんどが中国人によって経営されている。

空きペットボトルはカンパラの市街地だけで回収されているのではない。カンパラの中心部から北へ14キロメートルに位置するチテジという地区には、カンパラ唯一のごみ集積場がある。私がこの集積場へ見学に行くと、まず目に飛び込んできたのは、ごみをあさるおびたしい数のアフリカハゲコウであった。しかし、よく見るとそのハゲコウの群れに交じって、青い作業着を着た人が何やら作業をしている。集積場を管理する人かと思いきや、それにしても人数が多すぎる。ハゲコウの数と変わらないほど多くの数の「青い作業着の人」がいる。かれらの男女比は



写真1 街中の空地に集められた空きペットボトルの袋

ここで業者によって回収されるのを待つ。（2014年2月10日撮影）

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

半々ぐらいで、何やら会話をしながら作業している。

この「青い作業着の人」の正体は、カンパラ市（Kampala Capital City Authority）によって雇われたプラスチックの仕分け員であった。巨大なごみの山から、かれらはペットボトルやレジ袋を色別に拾い分けている。集積場内を少し歩き回ると、その麓に透明なペットボトルの山、黒いレジ袋の山、緑色のレジ袋など色とりどりの小さな山を見ることが出来る（写真2）。これらすべては「青い作業着の人」によって分別されたものだ。

こうして回収されたペットボトルが工場でどのように処理されるのかが気になり、ある日私は、カンパラ中心部から車で30分ほど西へ行った場所に位置するペットボトルのリサイクル工場を見学した。ここではチテジやカンパラの市街地から毎日、廃棄された大量のペットボトルがトラックで運ばれてくる。運ばれてきたペットボトルは、工場内で再度、透明や緑色などの色別に仕分けられ、ベ

ルトコンベア式の機械に投入される。その機械のなかでペットボトルは洗浄され、小さなチップ状に粉碎される（写真3）。粉碎されたペットボトルは、麻袋に詰められ中国へと運搬され、中国国内の工場では、チップが繊維にまで分解され、カーペットや服に再度生まれかわるそうだ。

1日に工場内で処理できるペットボトルの量は17トンである。しかし1日に工場へ運ばれてくるペットボトルは約40トンにもものぼり、工場の敷地内に蓄積されていく量のほうが圧倒的に多い。実際に、工場を見学した8ヵ月後に同じ工場の前を通りかかると、敷地の壁の一部が崩れ落ち、崩れたレンガの上にペットボトルが流れ込んでいた。

農村では調理油や調味料を入れたり、子どもの遊び道具にリメイクされたりと、貴重な資源であるペットボトル。だがカンパラでは再使用される量よりも廃棄される量が圧倒的に勝っている。もともと瓶でのみ販売されていた炭酸飲料製品も、現在ではそのほとんど



写真2 チテジの廃棄物集積場の様子

中央部と左手奥の袋が分類されたプラスチックである。尾根部にアフリカハゲコウがいるのが見える。（2013年6月4日撮影）



写真3 リサイクル工場にて

ここからペットボトルが機械に投入されていく。時間差で異なる色のペットボトルを粉碎する。（2013年7月11日撮影）

が500ミリリットルのペットボトル容器でも生産され、大型のスーパーマーケットだけでなく、郊外の小さな商店でも販売されている。最近では350ミリリットルサイズのペットボトル製品も登場しはじめたほどだ。

リサイクル工場の数が増えたり、各工場の規模が拡大したりすれば、増加するペットボトル廃棄量にも対応できるのであろうか。ウガンダにおける具体的な統計が発表されていないため、よりリサイクル産業が進んでいる日本の例から、この問いについて検証してみたい。

日本国内では現在、市町村や事業によって販売量の90.4パーセントを占める52万6,800トンのペットボトルが回収されている(2012年)[PETボトルリサイクル推進協議会 2013a]。回収されたペットボトルのうち、リサイクルされているのは79.9パーセントである。¹⁾つまり、日本では回収されたペットボトルのうち、2割を占める42万800トンがリサイクルされていないことになる。容器・包装リサイクル法が制定され、リサイクルが本格化しはじめた1995年のPET樹脂の生産量自体が14万100トンにすぎなかった[PETボトルリサイクル推進協議会 2013b]ことを考えると、20年前と比べて多量のペットボトルが現在、リサイクル以外の方法で処理されていることになる。

1995年当時と比べると、現在の日本では、ペットボトルを回収やリサイクルできる技術や設備は整ったかもしれない。実際に、1995年のPET樹脂の回収率は1.8パーセントにすぎなかった。しかし、廃棄されるペットボトルの量はリサイクルできる量以上に増加している。さらに、ペットボトルをリサイクルする機械を動かすのにも、莫大なエネルギーを消費する。このまま世界各地で増加するペットボトルの廃棄量に合わせてリサイクル技術が向上さえすればいいのか、疑問に感じてしまう。

「リサイクルは金にはなるけど、環境問題の解決にはならない」と、カンパラ市内にあるリサイクル工場の従業員は語る[Masaba 2013]。リサイクルさえすれば環境に優しいわけではない状況は、日本や欧米諸国など先進国だけではなく、アフリカでも深刻な問題となりはじめています。

引用文献

- Masaba, J. 2013 (Feb. 2). Recycling business to ease city's plastic waste problem, *New Vision*.
 PETボトルリサイクル推進協議会. 2013a. 「PETボトルリサイクル年次報告書2013」〈http://www.petbottle-rec.gr.jp/nenji/2013/pdf/pet13_2013.pdf〉(2014年6月2日)
 ————. 2013b. 「回収率推移など」〈<http://www.petbottle-rec.gr.jp/data/transition.html>〉(2014年7月2日)

1) PETボトルリサイクル推進協議会[2013a: 6]に示された、「国内向け回収量」と「国内再資源化量」をもとに筆者が計算した。なお、一般的に使用される「リサイクル率」とは、国内で再資源化されたペットボトルの量と輸出されたPETボトルの再資源化量を加算し、販売量で割ったものである[PETボトルリサイクル推進協議会 2013a]。